

## 答辞

春暖の候、日ごとに春の訪れを感じるようになりました。この善き日、私たち武蔵大学四年生は学び舎を巣立とうとしております。本日は、私たちのために素晴らしい卒業式を挙行してください、誠にありがとうございます。

思えば四年前の今ごろから、世の中はコロナ禍の波にじわじわと吸い寄せられるように変化をし、驚くような速度でウイルスが世界中を駆け巡っていきました。大学入学の年に、オンライン授業でしか勉強できなかった運命のめぐり合わせは、なんだか理不尽で、不公平だなどという憤りを感じたこともありました。その間、今まで当たり前だったことが、実はどれほどかけがえのない価値あるものだったかを少なからず、様々な場面で誰もが痛感したはずです。キャンパスに入れず、孤独や一抹の不安と背中合わせの日々は、自分の存在だけを抛り所にするしかありませんでした。しかし、そのような状況下であっても、先生方の工夫された授業内容やグループワークなどにより、深い学びを実現することができました。見通しが立たない状況下で、迅速にオンライン授業という学びの場を設けてくださった関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

一年次、ヨーロッパ文化学科ではドイツ語かフランス語の必修の授業が毎日あり、二年次になると第二外国語としてイタリア語などを履修しました。最初の頃は名詞の性や動詞や形容詞の活用の多さといった英語にはない難しさに苦戦し、時には先生を質問攻めにしてしまったこともありました。また、私は学科の勉強に加えて教職課程を履修していたため、連日、寝る間を惜しんで机に向かうことになりました。しかし、三年次までのそんな日々が、私を磨き、大きくしてくれたと確信します。

四年次になり私たちを待ち構えていたのは卒業論文でした。これは見方を変えれば一年次から四年次までのゼミナールの集大成とも言えるものですが、内容はそれまでに比べより専門的になり、参考文献の数や文字数も大幅に増えました。一つのテーマについてこれほどまでに膨大な資料をもとに探求するという経験は人生においてそうそうないことであり、それ故に、この課題は私たちひとりひとりにとって大きな挑戦であったとともに、成長への足掛かりでもあったと確信しています。

私たちは在学中に様々な知識を獲得しました。しかし、それと同等、もしくはそれ以上に重要であると思われることは「自ら疑問を持つて、自ら調査する」という力です。フランスの哲学者ルネ・デカルトは「*dubium sapientiae initium.*」(疑いは知のはじまりである)と言いました。既存の知識の獲得はもちろん必要ですが、当たり前として受け入れていることに疑問を抱き、探求することで、人は新たな知を得る。私たちは大学生としてこの能力を養いました。

今日、私たちは武蔵大学を卒業し、それぞれが決めた道を歩みはじめます。私達の学生生活には確かに制限があったかもしれませんが。しかし、人との距離を開けなければならぬ、人と会えないというこの特殊な期間にあって、この逆境にめげずここまで来られたという事実を私達は誇っていい、いえ、誇るべきだと私は考えます。変化の激しいこの世のなかで、どんなことが私たちを待ち受けているのか、期待と不安が今はない交ぜの状態です。しかし、コロナ禍を乗り越えた私達なら、未曾有のことに直面しても、きっとまた解決策を見つかるであろうと信じています。そして、私たちはこれからも、自信と誇りを胸に抱き、人生を一步一步踏みしめてまいります。

最後になりましたが、本日までご指導、ご支援して頂いた諸先生方、職員の皆様、ともに学生生活を過ごした友人たち、そして、一番近くで支えて下さった家族に、心より感謝申し上げます。武蔵大学がこれからも素晴らしい発展を遂げていくことを祈念して、答辞とさせていただきます。

二〇二四年三月二十二日

武蔵大学 第七十二回卒業生代表  
人文学部ヨーロッパ文化学科 山田デイビット優太郎